



“よねやま”から広がる新しい世界 ⑩

米山に、はまってみませんか？



山形南RC
(第2800地区 山形県)

カウンセラー(現・地区米山奨学委員長)
大久保章宏さん

カウンセラーって？

私が最初にカウンセラーを引き受けた米山奨学生が、台湾出身の呉佩珊さんでした。当初、何をすればいいのかわかりませんでしたが、彼女の明るさに助けられ、常に連絡を取り合う環境ができました。振り返ると、これはカウンセラーとして大事な仕事の第一歩だったと感じます。

より多くの会員に親しんでもらうため、親睦会には必ず呉さんを誘うようにしました。指導教官を例会に招いて奨学金授与の様子を見てもらうなど、大学の先生にも事業の意義を理解してもらえよう工夫しました。クラブ内で呉さんの中国語講座を開く予定でしたが、実現に至らず、それがちょっと心残りです。呉さんをただ見守るだけでしたが、クラブと奨学生との橋渡しをするのがカウンセラーの役割なのだと思います。

何物にも替え難い経験

今年度、私は地区米山奨学委員長を拝命しました。役割の多さに、当初は「えーっ、こんなにメンドクサイの!？」と面食らいました。しかし、ガバナー補佐として地区全体を見渡す経験をした上で言えることですが、数ある委員会の中でも、米山奨学委員会は特に充実感のある委員会だと断言できます。奨学生一人ひとりと密度の濃い、人間同士の付き合いができるからです。

母国を飛び出して海外で学位を取る。考えてみれば、並大抵の覚悟ではありません。奨学生を間近に見ていると、どの子にも強い決意を感じます。単位や資格の取得に向けて努力する姿、大学に泊まり込んで論文を仕上げ

る姿に圧倒されます。夢に向かって羽ばたく彼らの人生の一時期を共に過ごし、われわれが支えていくという奉仕の実感は、何物にも替え難いものです。

終わりなき継続事業

当地区は一人当たり平均寄付額が全国34地区で常に下位にあり、地区に割り当てられる奨学生数は今年度ついに一桁の9人となりました。私のクラブでは会長をはじめ支援に積極的ですが、大学の所在地が偏っていることもあり、理解が浸透しているとはいえません。

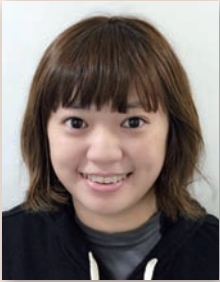
「奨学期間が終わったら音沙汰がない」という声も、よくある意見の一つです。私自身、呉さんの卒業後、1年ほど連絡が取れない時期がありました。いつか返事が来るだろうと楽観的に構え、たまにメールを送っていましたが、あとから聞くと、母国でお父さんが亡くなり、心身ともに大変な時期だったそうです。ロータリアンの理解を得る一つの鍵として、奨学生の皆さんには、学友になってからも連絡し続けるよう指導していますが、さまざまな事情があることも事実です。

米山は事業そのものも、奨学生との縁も、終わることのない継続事業です。次年度、地区では世話クラブ以外のサブクラブ制度を設け、地区内全てのクラブに奨学生との交流を経験してもらおうと考えています。私のように米山に“はまる”会員が増えることを願っています。



クラブの夏祭りに、現役の奨学生らと参加した呉さん(右から二人目)と大久保さん(右端)

米山カウンセラー、ガバナー補佐を務めた翌年度に、地区米山奨学委員長となった大久保章宏さん。米山記念奨学事業を盛り上げるため、地区独自の米山バッジを作ったり、サブクラブ制度を提案したりと、会員が米山に“はまる”工夫を重ねています。今回は、そんな大久保さんと、彼が“はまる”きっかけとなった最初の奨学生・呉佩珊^{ヨハイサン}さんのそれぞれに、当時の思い出や経験、米山の魅力について語っていただきました。



米山学友
ヨハイサン
呉 佩珊 さん

出身：台湾
奨学期間：2010 - 11
学校名：山形大学大学院

人と触れ合い、文化を感じて

私は大学時代の1年間、交換留学生として山形大学で学びました。帰国後も東北の生活が恋しく、今度は修士の学位を取るため再来日し、米山奨学生となりました。ロータリーは台湾でも有名で、例会はさぞかし厳粛だろうと緊張していましたが、山形南ロータリークラブは若い会員も多く、温かく気やかな雰囲気です、すぐに打ち解けることができました。

有益な卓話も楽しみでしたが、皆さんとの歓談が一番心弾む時間でした。例会以外にも、一緒に台湾料理や日本食を満喫したり、日本文化を深く理解するため、旅行にも行きました。そのせいか、大久保さんからは「ちゃんと勉強しているか」と、いつも心配(?)されましたが、勉学を一番の目的としながらも、留学したからにはその土地の人と触れ合い、文化を体験することが、勉学と同じくらい大切なことに思えました。

日本で学んだ多様性と柔軟性

奨学期間が終わるころ、東日本大震災が起きました。経験したことのない揺れが何度もあり不安が募る中、携帯電話の回線が繋がって真っ先に目に入ったのは大久保さんからの、私の身を案じるメールでした。皆さんそれぞれが大変な時に、とても感動しました。

私は現在、Apple Japanに勤め、仕事を楽しくしています。今、伝えたいことは、大久保さんをはじめ世話クラブの皆さん、台湾のことを伝える機会を与えてくださってありがとう。楽しい思い出をありがとう。4年たった今も、クラブの行事に誘ってくださってありがとう。多様性を受け入れて尊重し、柔軟性を持つことを、日本で学びました。米山奨学生としての数々の経験は、今はまだ自分の財産でしかありませんが、皆さんのように周りに良い影響を与えられる人間になりたいと思っています。米山学友であることを誇りに思い、日々のたくさんの出会いを大切にしていきます。

ロータリー米山記念奨学会事務局

米山記念奨学事業に関するお問い合わせ・ご意見、または“よねやまだより”についてのご意見を、公益財団法人ロータリー米山記念奨学会まで、ぜひお寄せください。

Tel. 03-3434-8681 Fax. 03-3578-8281

Eメール：mail@rotary-yoneyama.or.jp



米山奨学生・学友 60人超が日本の高校生と国際交流

関東在住の米山奨学生・学友らが9月26日、東京都立小平高等学校を訪れ、生徒約280人に対し国際交流の授業を行いました。東京米山友愛ロータリークラブ(RC)と東京米山ロータリーEクラブ2750の共催によるもので、3年目の今回は、国内5地区の奨学生・学友ら67人(出身：計15か国)が参加し、母国を紹介したり、言葉を教えたりしました。「アジアの学生と交流する機会が少ないので、生徒たちには良い刺激となった」と校長先生から感謝の言葉があり、発起人の朴貞子^{ハクテイ}さん(東京米山友愛RC)は「参加した皆さんが、各地で高校生との交流を展開してくれたら、それこそがロータリーの“善の循環”になる」と期待を述べました。



地区を超えて多数の奨学生・学友が参加